

3 推進体制作り

スタートカリキュラム委員会の運用

構成員

・校長、副校長、教務主任、1~3学年担任、養護教諭、栄養教諭特別支援 Co.

活動内容

・全員揃っての定期会議は年度初めと年度末
・メンバーによるやりとり

ex.給食開始時…1学年担任、栄養教諭

生活科年間計画の見直し…1,2学年担任

1学年の単元配列の検討…教務主任、1学年担任

・スタートカリキュラムの週計画の共有、学級通信の配付

スタートカリキュラムを1学年担任だけに任せることなく、教育課程に位置付けていくために、各学校の状況に合わせて、持続可能な形を探っていくことが大切です。1に示した手立てを基に、資質・能力ベースのカリキュラムについて、またその実施の意義について学校全体での共通理解を図ることが肝要です。さらに、幼児教育施設からの意見も取り入れ、児童や地域の実態に応じて改善を図っていくことも大事です。加えて、スタートカリキュラムの意義について、保護者とも入学前から共有し、児童を取り巻く大人が手を携えて育んでいこうという意識を共通にもつことも、児童の育ちをより確かにしていきます。

Ⅲ 研究のまとめ

幼小接続において何よりも重要なのは、接続期の子供たちの発達や学びの状況について、幼小の教職員が共通理解することです。その上で、一人一人の今ある姿をスタートとして、その後の指導について共に考えていくことが大切です。小学校教員の誰が1学年担任になっても、育まれてきた資質・能力を見取り、育んでいくことができるように、サポート体制を備えた組織としてつながっていくことが基盤となります。

スタートカリキュラムが計画のみに終わらず、実効性のあるものとして機能するためには、丁寧な児童理解と、それに応じて主体性をどのように育てたいかという教師のビジョンが大切です。

今回の実践により、1学年担任以外の教員からも、以下のように意識や行動が変化すると質問紙への回答をいただきました。

- ・「まだできない」ではなく「できていることは何か」という目で見ようという気持ちに変わった。
- ・園を参観することで1年生へのつながりを意識して子供たちの様子を見ることができた。
- ・子供の独り言を、注意や無理になくすのではなく、耳を傾け、その子の思考を理解しようとした。
- ・教師側からの一方的な指示ではなく、子供のつぶやきや過去の経験をくみとって生かしていこうと感じました。

今後も、学習する子供の視点に立ち、学び続ける意欲をこの先につないでいくような接続期の教育の在り方について探っていきたいと考えます。

研究報告書と補助資料は下記の岩手県立総合教育センターのWebページに掲載しております。

<http://www1.iwate-ed.jp/kankou/kkenkyu/175cd/r01ken.html>



QRコードはこちら



入学説明会で保護者に配付したリーフレット(報告書 p.68)

研究主題

幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続の具現化に関する研究

—低学年の発達の特性に応じた指導の工夫・改善とその推進体制作り—

【研究担当者】◎吉田 澄江 福田 勝雄

早川 貴之 及川 伸也

【この研究に対する問い合わせ先】

TEL 0198-27-2735 FAX 0198-27-3562

E-mail kyouka-r@center.iwate-ed.jp

I はじめに

資質・能力ベースの接続に向けて

「学習する子供の視点に立つ」を大前提とした、平成29年改訂の学習指導要領等で、育みたい資質・能力が、幼児期から高校卒業までを見通し、一貫的に示されました。小学校学習指導要領では、『『幼児期の終わりまでに育って欲しい姿』(『10の姿』)を踏まえた指導をすることにより、児童が主体的に自己を発揮しながら学びに向かうことが可能となるようにすること』と明記されました。特に、入学当初の幼小の円滑な接続の鍵として「スタートカリキュラム」の編成・実施が規定されました。

現状と課題

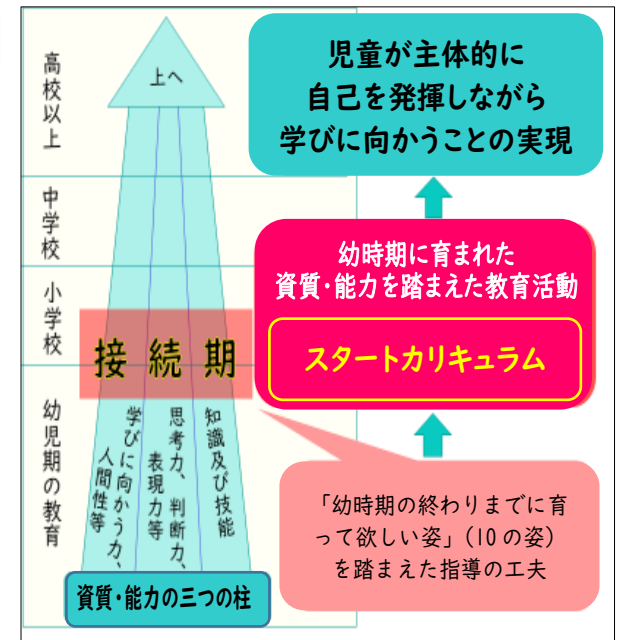
これまでも入学当初には、小学校生活に慣れるための工夫が行われてきましたが、その編成・実施には、大きく2つの課題があります。

- 1 指導内容面…0スタートの適応指導になりがちで、幼時期に育まれた資質・能力を生かしていない
- 2 体制面…年長・1学年担任に任せがちで、組織として評価・改善が行われにくい

資質・能力をつなぎ育てるためのスタートカリキュラム

この課題解決のために、幼児期の教育から小学校教育に接続していく時期を「接続期」として捉え、育みたい資質・能力を幼小間で共通理解し、その上で指導について工夫・改善していくことが求められます。

そこで、この研究では、幼児期の教育を通して育まれた資質・能力を踏まえた教育活動、つまり発達や学びをつなぐスタートカリキュラムを実施し、1学年児童が「主体的に自己を発揮しながら学びに向かうこと」の実現を目指すとともに、その実践を生かして、資質・能力を中学年へとつなぐ低学年カリキュラムの見直しを図りました。また、学校組織の中で計画・実施・評価・改善を行い、次年度以降のよりよい実践につながる推進体制の在り方を探りました。



1stステージ

小1プロブレムの解消を目指す
・適応指導中心

2ndステージ

安心してスタートすることを目指す
・幼児期の活動・時間の使い方を導入
・一人一人に寄り添う

3rdステージ

いきいきと学びに向かう子供を目指す
・幼時期に育まれた資質・能力(10の姿)を発揮
・思いや願いを生かした合科的・関連的な学び

本研究で目指す

II 円滑な幼小接続のための手立て

研究協力：花巻市立湯本小学校、ゆもと幼稚園、湯本保育園、
花巻市教育委員会 山口 賢子 指導主事

1 「発達特性に応じた指導の工夫・改善」と「推進体制作り」を支える共通の手立て

(1) 幼児期の教育と「10の姿」の理解（基本的な理解）のために

(ア) 保育参観・校内研修会

(イ) 保幼小連絡会（発達や学びの連続性の理解）

前年度からの取組です。今年度は、より日常的な職員間の交流も目指し、特別な時間を設けずに、教員の都合に応じて参観できるよう実施期間のみ設定して行いました。参観の際は「10の姿」を視点として幼児の姿を記録、考察しました。

今年度、4月の授業参観後の意見交換には、教務主任も加わって行いました。また、6月、10月にも授業参観と意見交換の機会をもちました。児童の発達を迫って参観することができ、幼児期に育んだ資質・能力が生かされているか確認できるとともに、幼保での指導がどうあればよいかを振り返る機会になっています。

保育参観した教員のメモから

4歳児 外で釣り

釣り竿を使って魚を釣る遊びは、難しいと感じましたが、釣ったときの子供たちは、とても嬉しそうであった。
その後、釣った魚を焼く場所もあり、子供たちの体験が大きく広がる遊びだと感じた。諦めずにやり遂げることで達成感を味わい、自信を持って行動できるようになり、自立心の芽生えにつながった。

(2) 新入児童の発達や学びの状況の把握（個別的・具体的な理解）のために

(ア) 書面等の引継ぎ

①指導要録 ②幼保活動経験連絡シート

(イ) 保幼小連絡会（児童の姿の共有）

(ウ) 1学年担任による見取り

(エ) 校内教職員による見取り

1学年担任の声

学級の係を設定したり、図工での絵の具の指導を計画したりする際に、事前に見通しをもって計画を立てることができた。実際の活動に際しても、子供からも聞くが、そうであっても事前に把握できてよかった。

幼保活動経験連絡シート

平成30年度卒園生 経験引き継ぎシート	
氏名	記入者氏名
入園の経緯	転入() 戸外()
伝達経緯	親戚() 祖父母() 兄弟() メンコ・竹とんぼ・その他()
経緯	ボール遊び() ボール遊び() ボール遊び()
活動名	子供の関わり方(世話、表現や造形等への発展等)
内容	お花見() 遠足() 運動会() 祭り() 夏祭り() 秋祭り() 冬祭り() 正月() 行事()
感想	子供の関わり方(世話、表現や造形等への発展等)
備考	その他()
活動名	活動名
内容	内容
感想	感想
備考	備考
活動名	活動名
内容	内容
感想	感想
備考	備考

この幼保活動経験連絡シートは、指導要録が個人の発達や学びの様子を伝えるものであるのに対し、年長児が集団としてどのような活動や経験を積んできたかについて調査するものです。
例えば、飼育・栽培経験の有無や育ててきた動植物、行って来た係活動等が把握できるので、小学校での教材選択や、活動内容等を構想する際に生かすことができます。

(報告書 p.32, 補助資料 p.33)



2 スタートカリキュラムの実践

(1) 児童の思考の流れを生かしたカリキュラム

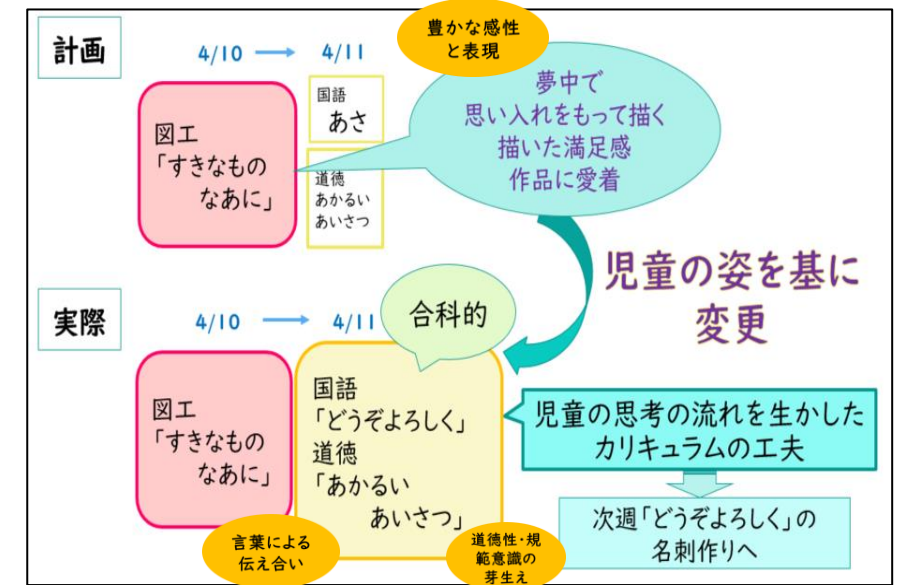
…10の姿

入学3日目、図画工作でクレパスで描く経験をした後、当初は描いた絵を作品として掲示する予定でしたが、子供たちが夢中で思い入れをもって描いている姿から、その絵を使って国語の自己紹介をすることで、自信をもって自己紹介できるのではと考えて、翌日の計画を修正しました。

計画していた国語の「あさ」の音読は翌週行うこととし、国語の「どうぞよろしく」と道徳の「あかるいあいさつ」を合科的に行いました。児童

の思考の流れを生かすことで、その後の活動も必然性のある自然な流れで行うことができました。

自己紹介の際は、自分の好きなものについて自信をもって発表する児童の姿が見られました。また、聞いている児童も質問や感想をどんどん出していました。それぞれの場面で、「10の姿」、つまり幼時期に育まれた資質・能力が発揮されていることがわかります。



(2) 学習指導及び学習環境の工夫

「主体的に自己を発揮する」ための学習指導

手立て1 園での学び（経験）を生かす場面を取り入れる（点線部）

手立て2 友達や先生に認められる場面を取り入れる（波線部）

手立て3 自分で考え、判断し行動するという学びのプロセスを取り入れる（下線部）

4月11日 初めてのじゃんけん列車の後で

T: 「すごく楽しかったけど、ちょっと危ないところがあったの、気付いた人いた？」

C: 「転んでた人がいた」

思考力の芽生え

T: 「そう、転んで頭から血が出たら大変！転ばないためにどうすればいい？」

言葉による伝え合い

C: 「ゆっくりあるく」「ひっぱったりしない」「押さない」

道徳性・規範意識の芽生え

T: 「いい考えだね」

C: 「こちょこちょしない」

T: 「わかるわかる！みんなが言ったことに気をつけて、もう一回やってみよう」

このやりとりでは、それぞれの手立てが機能していることがわかるとともに、図に示したような「10の姿」が発揮されていることがわかります。

生活に必要なルールやマナーも、思いや願いを実現する過程において身につけていくものであり、取り出して指導するものではない、と学習指導要領解説生活編 (p.13, p.72) に示されています。

この実践のように、幼時期に育まれた資質・能力を生かして主体的に課題解決に向かう姿を大切にしていきたいものです。